



六十の手習い

(財) 地方公務員等ライフプラン協会 山野岳義

還

暦が近づいた頃、何か新しいことを始めてみたくなった。

昔から憧れみたいなものを持っていた書道を勉強したいとも思ったのだが、子供の時から手のつけられない悪筆である。就職時はワープロなど無い時代、新人はよく上司の書いた文書を浄書させられたものだが、私などは一度上司から浄書を頼まれたものの、「浄書させたら、読めなくなった」と二度と命じられることは無かった。

たまたま似たような悪筆の後輩から、今はやりの通信教育で書道を始めましたという話を聞き、彼が始めるのならと、早速こちらも申し込んだ。ところが、小学生時代の習字の時間は、墨をつけ合い先生から怒られた記憶ぐらいしか無いものだから、筆の下ろし方から筆の洗い方まで何もわからない。紙は100円ショップ、墨は墨汁、それでも1年の過程を終え終了証書もらった。しかし添削を出す度に「うまくなっただろう」と確認を強要された家内に不愉快な思いをさせただけで、得たものは無いに等しい。

これではダメだと、今度は「書学院」という歴史のある全国的な書道学校に入学した。隔週土曜日4時間で、2年間、行書、楷書、草書、かな、写経など体系的に習うコースである。講師陣も揃っている。クラスは、60歳前後が3人、あとは20歳から40歳代の美女達十数人である。これは楽しいぞと喜んだものの、そもそも仕事や家事の合間を見つけて書道学校に通うような女性達は、書道が好きで上手な人に限られる。それに比べて当方は、人並みになりたいというレベルであるから、大学生と小学生と一緒に勉強するようなものである。当初は各自の作品を壁に貼り先生が講評する時など逃げ出したくなったものだが、次第に開き直りとあきらめで、どうにか落ちこぼれ寸前で引っか

かり卒業することができた。

2年間一緒に勉強していると次第に年齢差を感じなくなり、学生時代の同級生と同じ感覚で話すようになる(相手は迷惑?)。卒業式では、仰げば尊しを歌い、謝恩会では余興の幹事もすると、新しい人達との繋がりができてくる。同級生の結婚式では、初めて新婦ご友人で出席させてもらった。

卒業後も、テーマ別の講座に通い、学期が終わる度に飲み会を提案しやや^{ひんしゆく}響慶を^{ひんしゆく}かっていたのだが、そのうちクラスの仲間から、卒業して2年ぐらいたったらグループ展を開こうという話が持ち上がった。

書くことはともかく、会場の手配やら、表装屋さんとの交渉などはやはり年の功で次第に涉外系の役回りになってきた。皆さん展示会は初めての経験で、試行錯誤で取り組んだ。

区役所の展示場を借り、3日間にわたって、色紙、写経、横額、^{れんおち}聯落、条幅など作品33点を展示することができた。来場者355人、記帳者135人は予想もしなかった人数である。作品を見もらうことに加え、展示会を機会に何年も会っていなかった友人と旧交を温めた人など皆さん大いに得るものがあったようだ。開催までの苦労も忘れ、次はいつにしようかという意気込みである。

何となく始めた六十の手習いが、新しい世界を開いてくれた。

